



ONE WORLD Info

英語教育 通信

中高一貫校に勤務して分かったこと … 田口 徹 ●

小学校英語の本質を知り、小中連携を進める … 中村 有佐 ●

学級担任中心で進める小学校外国語活動(英語活動) … 宮下 哲夫 ●

Eco-speak and Greenwords … Peter J. Collins ●

とっておきの英語① I love you. … 野田 小枝子 ●

編集部からのお知らせとお願い ●

中高一貫校に勤務して分かったこと

東京都千代田区立九段中等教育学校 田口 徹

1 目指すべき授業のヒントは全英連

中高が連携すると、授業はどう変わるのか？ 百聞は一見にしかず。平成 21 年度の全国英語教育研究団体連合会（全英連）東京大会高等学校授業実演の部、本校の郷薫（ごう かおり）教諭の授業を見ていただいた方は「なるほど、あなるのか」と納得していただけると思う。残念ながら見ていない方は、ぜひ、同僚や近隣の学校、研究会の仲間に聞くか、それでも無理なときは全英連本部に問い合わせ、授業記録 DVD を手に入れていただきたい。

郷教諭は、本校が勤務 2 校目である 20 代の若手教師である。全英連史上最年少の授業実演者であったが、歴代のベテラン教師に負けない堂々とした授業の進め方に驚いた参観者も多かったのではないだろうか。彼女のメリハリのある英語による指示、オーラル・インタラクション、それを聞く生徒たちの真剣な表情、そして音読練習や発表の際の反応、元気のよさ、先生と生徒、そしてクラスの仲間同士の信頼関係が見える素晴らしい授業だった。ハイライトともいえる教科書の retelling（語り直し）の部分でも大勢の見学者の前で物おじすることなく、どの生徒も自分の言葉を交えて発表していた。

彼らは高校 1 年生（本校では 4 年生と呼ぶ）。ともすれば英語 I の授業では本文の理解のために教師の説明が多くなり、生徒は声も出したがらず、“受動的”な授業が多く見られるが、全英連の授業は違っていた。これは郷教諭の指導力と生徒のひたむきさ、そして英語力のたまものであるが、それを支えているの

は、中学校課程 3 年間を通して英語による授業スタイルを継続して指導してきた、本校英語科スタッフのチームワークのよさと、指導案の“共有化”にほかならない。



2 人的交流があってこその中高一貫

本校では、全クラスとも英語の授業は少人数で、1 クラス 2 展開、または習熟度による 2 クラス 4 展開で、1 学年を 4 人の教師で指導している。少人数授業がうまく機能している学校が少ない原因は、横の連携がまったくなく、進度だけ合わせて、考え方も指導経験も異なる複数の教員がそれぞれ自分のやり方で勝手に指導するため、生徒が戸惑ってしまうところにある。

本校は中高一貫校なので、元中学校籍・高校籍の先生方が混在している。しかし、中高一貫校にありがちな中学校籍の先生は中学生だけ、高校籍の先生は高校生だけを指導するといった人的な分断はなく、私のように 29 年間中学校一筋の教員が、着任早々高校 2・3 年生の授業を担当することもあれば、今年高校から赴任してきた先生が、中学校 2 年生

の担当をするなどということは当たり前である。ただ、校種が異なると、指導方法や生徒の発達段階の差異による反応の違い、また英語そのもののレベルの開きに戸惑うことは当然多い。中学校籍の教員は指導法よりも英語のレベルそのものに頭を抱える。後述するが、私はそうだった。高校籍の教員は、指導法に悩むことが多い。中学校の教科書を見て「たった5行の本文を、どうやって50分もかけて指導するのですか？」という質問が出てくる。この状態のまま中学校で少人数授業を始め、授業の進め方をすべて担当者に任せてしまうと、問題が起こるのは前述したとおりである。

そこで本校では、学年の中で経験のある責任者が指導案を作成し、残りの教員はその案に基づいて、全クラス同じスタイルで授業をしている。今年度私が担当している中学1年生の指導案の一例を最後に載せたのでご覧いただきたい。進度、指導目標だけではなく、オーラル・インタラクションや置き換え練習などの具体例まで書いている。これによって、今まで中学校で教えたことのない高校籍の先生もスムーズに授業を行うことができる。

<指導案作成で常に考えること>

- (1) 授業や各活動の目的は何か、活動間に関連を持たせているか
- (2) 授業の山はつくっているか
- (3) 達成感や満足感を保障できるか
- (4) 生徒に活動させる授業となっているか

この指導案の共有化によって指導を受け、3年間の中学校課程を終え、高校生になったのが前述した授業実演の生徒たちなのである。中高一貫ではない場合、中学校と高校ではほとんど交流がないのが実態で、お互いの授業スタイルについては知らない。その結果、指導方法や授業の進め方などは大きく異なり、生徒は困惑することも多い。私も以前中学校で3年間教えた生徒たちが高校に入学して、「先生が英語を使わない。日本語の説明ばかり。音読しても皆、声を出さない。田口

先生はむやみに訳すなどと言ったけど、訳すことが英語の授業…」など、多くの不満の声をよく耳にした。だが、全英連の生徒たちは高校課程になって先生が郷教諭に変わっても、基本的には昨年までの中学校のときと同じやり方で授業が行われるので、抵抗なくあそこまで自然にのびのびとできたのだと思う。まさに中高一貫のよさを示す好例の一つとして紹介させていただいた。

3 高校で教えてみて分かったこと

(1) 英語のレベルの開き

私自身が中高一貫校に来て、初めて高校生を教えてみて分かったことは、自分の英語力のなさ、大学入試に対する知識のなさである。私の場合、今までセンター入試の問題くらいは毎年解いていたが、それ以外の情報はほとんどない状態のまま着任した。

高校生にとって、大学入試はもっとも大きな関心事であり、進学校では1年生の段階から意識して勉強している生徒も多い。したがって、大学入試で求められる英語を知ることが授業づくりの出発点と考えた。まずは自分自身が大学受験生に戻ったつもりで、生徒に持たせている参考書、問題集を徹底的に読み、解いた。文法や語法問題を解く際、忘れているならまだしも、まったく知らない、あるいは見たこともない表現があったり、難関大学の問題などには答えに窮して手が止まることもしばしばあったりした。

自分が分からないことを生徒に教えることほど不安なことはない。授業前の教材研究では辞書、参考書で調べ、同僚のネイティブに尋ね、生徒からの質問に対応できるように準備してから授業に臨んだ。分からない単語や表現はメモ帳に書き出して、通勤の電車の中で覚えた。中学校で教えていたときは how to teach に教材研究のすべての時間を使えたが、高校ではそれ以前に what to teach をまず自分自身が完全に理解することから始めなければならないので、とにかく準備に時間が

かかった。特にもどかしさを感じたのは、英作文の授業である。英語の表現として自然か、妥当かを瞬時に判断しなければならない場面が多く、高校生が納得するように説明する難しさをいつも感じていた。高校で教えることで、当たり前なことだが、プロとして、自分自身の英語力を磨き続ける重要性を改めて感じた。

(2) テキストの内容の深さ

高校では、使用する教科書を自分自身で決めることができるのが何よりの利点である。中学校の場合は義務教育で国庫負担、広域採択制で区市町村単位により教科書が決まるので、ユーザーである教師に選択権はない。したがって、自分の使用したい教科書が使えるとは限らない。一方、高校の場合は学校ごと、または学年ごとに担当の教師が決められるので、指導者の好み、生徒の実態に合わせて選ぶことができる。英語Ⅰ・Ⅱの教科書は、レベル・内容ともバラエティーに富んでおり、語いの壁もあまりないので、興味をひくトピックが多い。身近なお茶や豆腐の歴史から、有名人の自伝、環境問題など大人が読んでも面白い。英語を学ぶだけでなく、英語で学ぶ楽しさを味わえるのが高校の教科書である。

だが、私が今まで見た高校の授業は、いきなり最初の1ページ目から読んで訳して解説している授業が多かった。中学校では、まず題材に興味を持たせ“読んでみたい”という気持ちにさせるために、絵や実物を見せながらオーラル・インタラクションから入るのが普通である。このような“きめ細やかな”中学校でのやり方を、本校では高校生にも行っている。

(3) 文法用語・和訳の必要性

中学校で教えているときは、現在進行形・不定詞・関係代名詞などの文法用語は必要最低限しか使わず、その表現を使った英文を理解し使えるようになってから「実はこのよう

な表現を○○といいます」と説明し、その後も授業では多用しないようにしてきた。しかし、高校では説明する内容も多く、ある程度効率よく説明するには、中学校のときより使用する頻度を多くする必要があると感じた。

和訳についても、中学校では1文1文訳すことを、1～3年生まで行わなかった。和訳をしなくてもほかの方法(Q&Aに答えさせる、タスクに対して答えの文にアンダーラインを引かせるなど)で、生徒の理解度を判断できたからである。ただし、英語学習で日本語を利用することは必要なので、試験前には和訳をプリントして配布していた。高校生を教えてみて、抽象的な文章や文学的な文章を読んだり、修飾関係が複雑な文を理解させたいとき、やはり和訳は有効だと感じた。だが、気をつけなければならないのは、“訳せる＝理解している”ではないので、簡単な英語で言い換えさせたり、具体例を言わせたりするなど、和訳だけに頼らないことが大切である。

4 最後に

「中学校ではオーラル重視というが、ろくに文法も知らずに入学してくる生徒が多い」と、高校の先生の弁。一方、「せっかくコミュニケーション重視の授業を行い、実技テストも取り入れてきたのに、高校に入学したとたんに読んで訳すだけ。あれでは皆、英語嫌いになってしまう」とは、中学校の先生の弁。このように、お互いが感情的に文句を言うだけではなんの解決にもならない。

初級学習者を教えることの大変さ、難関大学に合格させる力をつけるための苦労など、お互いが相手の仕事に敬意を表し、よい点を学び合おうとする気持ちがなければ中高連携の成功はない。そして、6年間で生徒にどんな力をつけさせたいのかという大きな目標を意識して日々の授業に臨むこと、何より本校の英語科のように皆仲良くごつくばらんに言い合えるムードをつくることが中高連携、中高一貫の成功の秘訣だと思う。

<指導案α 1 年 (7 回生) No. 023 >

I Date: 2010.6.21 ① 1・3 組 ② 2・4 組

II Class: 少人数 (50 分授業)

III Textbook / Material: 教科書 Unit 4 Part 1, Flash Card, Picture Card, 歌詞カード, "Hello, Goodbye" の CD, 動物の絵 (数枚), 折り紙で折ったツル

IV Today's Goal: 疑問詞 What の理解と運用

V Target Sentence: What's this? - It's a bird.

VI Teaching Procedure in Detail:

[Stage 1] Greeting and Song (5 min.)

(生徒が起立し, 全員先生を見る)

T: Good morning (afternoon), everyone.

S: Good morning, Mr. Taguchi. How are you?

T: I'm fine, thank you. OK. Let's sing the song!

Take out the song sheet. Are you ready?

(立たせたまま, "Hello, Goodbye" を歌わせる。歌い終わったら座らせ, 以下今まで同様, 出欠・曜日・日付・天気などを個人に質問し, 全員に復唱させる)

[Stage 2]

Introduction of the Target Sentence (15min.)

1) Oral Interaction

(トラの絵を上半分隠し, 足だけを見せる)

T: Look at this. This is an animal. You can see four legs. What's this?

S: Dog?

T: きちんと英文で聞いてみよう。Is this a dog? Class.

S: Is this a dog?

T: No, it isn't. Anyone else?

S: Is this (that) a cat?

T: No, it isn't. It's big.

S: Is this a lion?

T: No, it isn't. Do you give up?

(What's this? を教える)

S: What's this?

T: (見せながら) It's a tiger! (すぐ当たってしまったときのために deer, manta の絵を用意しておく)

2) Explanation of the Target Sentence

T: (板書・説明) Is this a _____? で聞いて見当がつかなかったとき, 何て言っていた?

S: What.

T: 音から想像して最初の文字は?

S: W.

T: 文のどの位置にあった?

S: 最初。

[Today's Point] 何か知りたいとき

[マンタの絵]

A: Is this a fish? / Yes, it is.

B: What is (What's) this? \ It's a manta.

※ AB の違いを生徒に言わせ最後に先生が説明してください。文末のイントネーション指導もお願いします。

3) Substitution Drill (今まで使った文房具・魚・果物・野菜の絵を見せながら)

T: What's this?

S: It's a _____.

T: That's right. (全体→個人)

4) Pair Work (生徒を 2 人立たせて見本をさせる。じゃんけんさせ, 負けた生徒は目をつぶり, 手のひらを出す。負けた生徒の手に文房具などを載せ, 勝った生徒は What's this? と尋ねる。負けた生徒は触った感触で It's a _____ と答える。当たれば, 勝った生徒は That's right. と言う。当たれば交代)

[Stage 3] Introduction of the Textbook (20min.)

1) Oral Interaction

(折り紙で折ったツルを見せて)

T: What's this?

S: Tsuru / Origami.

T: Yes, it's a bird / crane. Origami paper is Japanese culture. (Picture Card を見せて) Who is this?

S: Mike.

T: Who is this?

S: I don't know.

T: She is a new character Judy. Listen to the CD.

2) Q&A <Book Closed>

T: どんな折り紙が話題に出てきた?

S: 鳥, ウサギ。

T: Judy はそれがすぐに分かった?

S: 鳥は分かったけど, ウサギは分からない。

T: なぜ? … <Book Open> (CD を聞かせる)

3) 新出語指導 (Flash Card)

※ right, really, rabbit など, r の発音指導を丁寧にお願います。know の k / an, apple, orange の a も同様。

4) 内容説明のポイント

p.32, l. 1 アンダーライン (UL), l. 3 そのとおり。(Right だけでも OK), p.33, l. 2 UL (an を○で囲む), l. 4 Really? ※言い方で気持ちのこめ方が変わる具体例を示してください (軽い相づち・驚いたとき)。

5) Reading Aloud (音読)

Mimic & Memorize, Overlapping (twice), Read & Look up, Role Playing, Pair Work, Demonstration

6) Stamp Chance

(タイマーをセットし, 5 分限定で Pair Work のペアで発表させる。3 段階で評価し, 拍手して, はんこを押す)

[Stage 4] Consolidation and Greeting (5min.)

(ノートを取らせる。終わった生徒にはワーク・ブックの pp. 24-25 をさせる)

○宿題 ①教科書 pp. 32-33, ②ワーク・ブック pp. 24-25
(次回ディクテーションテストあり)

小学校英語の本質を知り，小中連携を進める

神奈川県南足柄市立南足柄小学校 中村 有佐^{ゆうすけ}

1 小学校との異文化交流を

教員ならばだれでも知っている「国際理解教育」。その歴史は，第二次世界大戦後，ユネスコが提唱したことから始まりました。戦争を起こさないためには，まずお互いを知ること，お互いの文化を理解することが大切であると考えたからです。「人類の平和な未来」という大きな目的のためには，まず「お互いを知る」という小さなことから始めなければいけません。人は，相手の顔が見えない，相手のことをよく知らないという状況のとき，不安を感じたり不信感を持ったりします。それは自然なことですし，人間同士の関係というものはそういうものなのでしょう。

さて，話は小中連携です。中学校の先生方は，小学校と中学校の間に，何か不信感のようなものが横たわっていると感じたことがあるでしょう。しかし，その不信感は，お互いをよく知らないことに起因していることが多いのです。お互い顔を合わせ，授業を見せ合い，それぞれの努力や大変な状況を知ること，そのような交流をすることで，不信感は少なくなっていくと思います。そして小学校と中学校の教員が，同じ方向を見ることができるようになれば，不信感が消えるどころかプラスの副産物がたくさん生まれてきます。先生方が毎日のように行っている生徒指導と似ています。教員同士が連携して，同じ姿勢で生徒に対応する，保護者と教員が同じ方向を向く，そのようなことで生徒の問題が収まっていく

ことを先生方も経験しているはずです。

中学校の先生方をお願いしたいことは，まず実際に，小学校の授業を参観してくださいということです。研究授業でも学校公開週間でもよいと思います。相手を知らなくては始まりません。英語活動の授業でなくてもかまいません。生徒が50分間座って授業を聞くことは当たり前と思っているかもしれませんが，そこまで成長するには小学校の先生方の変な努力があります。小学生は，つまらない授業であればすぐに飽きてしましますし，教室から出てしまう児童もいます。小学校で1年間授業を行った中学校英語科の先生は，「45分間，児童をひきつける授業をするのは大変なことだと分かった」と話していました。

そして次に，小学校の先生方にも中学校の英語授業を公開してください。英語を教える専門家としての授業を見せてください。授業に対する思い，工夫，生徒指導の大変さなどを語ってください。そのようにしてお互いが知り合い，頑張りや大変さを認め合う関係をつくるのが小中連携の第一歩であり，一番大切なことだと思います。

2 南足柄小中の連携

次に，南足柄小学校（以下南小）と南足柄中学校（以下南中）の小中連携について紹介します。南足柄市は，平成19年度から市全体の学校が幼小中一貫教育について，文部科

学省指定の研究開発学校となりました。私は小学校の教員ですが、その研究の関係で小中兼務教諭に任命され、週に1日、南中に英語科のTTのため勤務しました。そこで私は、小学校と中学校の文化の違いを感じると同時に、中学校の大変さ、その中で頑張っている先生方の姿を見てきました。また私同様、兼務教諭となった南中の英語科の先生も、小学校の担任と共に英語活動を行う中で、小学校の先生方の細かい配慮や多くの教科を教える大変さ、仕事の忙しさを感じたそうです。

ほかの教科でも、小中の教員が一緒に一貫カリキュラムをつくったり、お互いに授業参観したり、さまざまな交流をしたりすることで、私の所属校である南小と南中は顔の見える関係になっていきました。幼稚園とも同様です。幼小中で会食する機会を設けたりして、お互いの敷居がずいぶん低くなっていました。そうすると、研究は進むものです。お互いがやる気になります。もともと目的は同じなのですから。

3 小学校に英語を導入する

特に、英語教育部会は市の研究の柱の一つであり、今までなかった「小学校英語を創っていく」という大きな任務があったこともあり、熱気がありました。中学校の英語科の先生は、小学校英語に可能性を感じていましたし、私も何とかして本当に意味のある「英語活動」にしていきたいと思っていましたから。私は平成20年度から小学校英語活動の専科となり、市内の各学校を1日ずつ回り、担任とTTで授業をすることになりました。ほかにも、中学校英語科の教員1名、ALT1名が配置され、市内の小学校5・6年生の年間35時間の英語活動はすべて、専科と担任のTTで授業する体制が整えられました。教育長を



はじめ市教委は大変協力的で、できる限りのバックアップをしてくれました。私は授業プランづくりを担当し、中学校英語科の兼務教諭とALT、市の英語教育部会に協力していただき、実践をしていきました。

まだまだ英語に対して抵抗感を持っている小学校の先生方に「英語活動は楽しい」と思ってもらえるように、市教委と一緒に計画を練りました。①担任の負担を減らすこと、②自信を持って授業ができるようにすること、③喜び・達成感がある授業プランを工夫し、楽しさを感じてもらうことなどです。具体的には、担任が話す英語表現も書き入れた詳細なスクリプトを毎時間づくり、それを基に必ず担任と打ち合わせをして、授業に臨むようにしました。そうすることで、自信を持って授業ができるとともに、毎回の授業自体が担任の研修の場となると考えたからです。スクリプトづくりは、気が遠くなるほどタフな作業でしたが、これらは大変効果があり、担任の先生方は自然に英語に親しんでくださるようになり、「英語活動は楽しい」と感じる先生も増えていきました。

担任の先生が楽しそうに授業をしている様子を見ることは、児童にとって、とても嬉しいことです。児童をひきつける「喜び・達成感がある授業プラン」を工夫してつくったこ

とも功を奏し、このシステム導入前の平成19年7月に行ったアンケートでは、「英語活動が好き」と答えた6年生は57%でしたが、研究最後の平成22年3月には89%まで伸びました。また、市内の中学校英語科の教員と小学校英語担当の教員が集まる会議を年に数回行ったことで、現在、市内のどの中学校でも、生徒が小学校英語活動で学んだことを共通理解できており、それらを生かして授業が行えています。中学校入学後の生徒の様子を調査したところ、次のような傾向がありました。キラキラした目も健在です。

＜南足柄市中学校生徒の入学後の様子＞

- ① 英語の学習に対して意欲的である。
- ② 「聞く力」が養われており、分からない場合もキー・ワードを聞き取ろうという姿勢がある。
- ③ 「話すこと」に対して自信を持っており、積極的にペア・ワークを行う。
- ④ 「書くこと」に意欲的であり、習得が早い。

研究期間が終わった今、今後の課題は主に2つあります。「小学校英語活動の授業の質を維持するためにどう工夫するか」、「中学校英語が小学校英語活動の成果を受けて、いかに授業改善をするか」ということです。

市教委が小中連携の体制を整え、熱意のある人材がそろい、お互いにコミュニケーションを取りながら研究を進めていったことなどで、南足柄市の英語教育の小中連携は素晴らしい成果を生みました。先生方の地域にはどのような小中連携が必要なのか、そのためにどのような協力をし、どのようなシステムをつくったらいいのか。目の前の子どもたちにどのような授業を提供し、どのような力をつけさせたいのか。それらを真剣に考え、話し合って行動を起こしてください。目的は一つです。皆がそれを心に刻めば、道は開けると

思います。

4 小学校英語の本質を

来年度、日本教育史上初めて「外国語活動」が小学校に導入されます。今は創世記です。多くの小学校ではまだ、どうしてよいのかははっきりした道筋が見えず、ピンチの状態です。しかし、逆にめったにないチャンスでもあります。それぞれの立場でしっかり考え、エネルギーを注ぐことで、英語教育全体がよりよい方向に向かうことができるかもしれないのです。

そこで、中学校英語科の先生方に助けとっていただきたいのです。英語を教える専門家の立場から、小学校英語を見極め、模索している小学校の先生方に方向を指し示し、アドバイスをお願いします。小学校英語のあり方を考えることは、先生方自身が今まで気が付かなかった視点を持つことにもなると思います。まず、中学校英語と質が異なる小学校英語について知ってください。

では、最後に、「小学校英語の本質」について考えてみます。

1. 『楽しさ、喜び』が伴う活動を

「英語活動」の目的は、英語を授業のツールとして「コミュニケーション能力の素地」を育成することです。そのための方法論を考える前に、まず英語ではなく、母語である日本語の「コミュニケーション能力の素地」を、私たちはどうやって育んできたのかを考えてみましょう。

私たちは、乳児期から幼児期にかけて、親の愛情がこもったスキンシップ・表情・言葉がけなどにより、人の温かさを感じるとともに、気持ちが分かる、言葉が分かる『楽しさ、喜び』を心に刻んできました。そしてそれらのことがいつしか「自分も伝えたい」という

意欲になっていきます。その後、言葉として口に出して伝えたとき、言いたいことが言えた『喜び』や、気持ちが伝わった『喜び』を感じるようになっていきます。このように、コミュニケーションには、『楽しさ、喜び』が伴うからこそ、その素地が自然に私たちの中に育成されてきたと考えられます。

新しい言語との出会いである小学校の英語活動も、上記のことを考慮に入れ『楽しさ、喜び』のある活動を行っていくことが、自然であり、望ましいと考えます。

まず、児童が聞きたくなる内容を、意味が推測可能な英語を使って構成し、『聞いて理解できる喜び』を感じさせることができる授業を目指すべきでしょう。乳幼児のように「聞かせる」ことが最初です。ここに多くの時間を注ぐ必要があります。そして次に、楽しみながら自然に英語の表現に親しみ、レディネスを十分につくってから『話す、触れ合う喜び』を感じさせる授業を行うことです。つまり『楽しさ、喜び』が伴う活動を工夫することが、「コミュニケーション能力の素地」を育成していくことにつながるのです。

心に『喜び』を刻んでいくことで、児童はもっと英語を「聞きたい」「話したい」「人と触れ合いたい」というエネルギーをためていきます。そのエネルギーがパワーとなって、中学校の英語学習や日常のコミュニケーションに向かう。それが小学校英語の本質といえるでしょう。

2. 授業で育てたいこと

英語活動においても、スキルは大切です。しかしスキル中心の英語活動で、単語や簡単なフレーズを機械的に覚えても、興味や関心が持てなければ頭打ちになるのは目に見えています。

スキルを押さえながらも、それ以上に大

切にしたいのは、①毎回の授業で児童の脳に「喜びシナプス」をつくることです。「英語って楽しい!」「聞いていたら分かった!」「そうなんだ!」「友だちと触れ合うのって楽しい!」「英語が読めた!」。このような「喜びシナプス」をどんどん増やしていく、そのようなイメージを持って授業を構成し、授業に臨んでほしいと思います。そして言葉の面白さを扱った授業や国際理解の視点からの授業、外国の方との交流体験などを通して、②異文化への「あこがれ」を持たせるようにします。それらの「喜び」や「あこがれ」が、いつしか③外国の人と関わりたい、英語でコミュニケーションできるようになりたいなどの「強い思い」に結びついていくと考えられます。

私は「英語の力」を使って、これらのことを育てていくことで、児童の心の扉を少しずつ開くことができると感じています。そのことは、まさに進んで人と関わろうとするコミュニケーション能力の素地となるはずです。

残念ながら、具体的に「英語活動」の授業をどう進めていけばよいのかについては紙面の都合上お話しできません。しかし、本質を外さないようにすれば、よい授業、よい連携が実現できると思います。小学校英語を創り、小中連携を進めていく道は平坦ではありませんが、児童の可能性を引き出すやりがいがある仕事です。一緒に道を切り開いていきましょう。





学級担任中心で進める 小学校外国語活動(英語活動)

福岡県大牟田市立明治小学校 宮下 哲夫



大牟田市の取り組みから

福岡県最南端に位置する大牟田市は、平成9年の炭坑閉山まで石炭関連産業地域として日本のエネルギー産業を支えてきた街です。近年は、新しい街づくりに向け、市をあげてさまざまな取り組みがなされています。

教育についても、市の特色の一つとして、平成12年度から全小学校で英語活動を実施し始め、今年で11年目を迎えています。教育特区ではなく、通常の公立小学校での英語活動であり、しかも、学級担任を中心とした取り組みです。学級担任が進めるよさには、次のような点が考えられます。

- ①子どもの実態を把握している。
- ②子どもの実態に応じた活動を計画できる。
- ③活動中も、子どもの様子を見ながら指導できる。
- ④教師が英語を話そうとするモデルとなることで、教師の姿を見て子どもも意欲的に活動する。
- ⑤外国語活動(英語活動)のよさを学級経営に生かすこともできる。

このような方針のもと、各学校では、授業を中心に校内研修を行い、子どもの実態に応じて実践を重ねてきました。明治小学校でも、学級担任が進める外国語活動(英語活動)の充実を図るため、「子どもと共に楽しむ外国語活動」を合い言葉に、全職員による協働体制を築いています。

明治小学校の研究の取り組み

本校は、平成18年度に市教育委員会から

「英語活動」の研究校指定を受けました。また、平成19年度から文部科学省の「小学校における英語活動等国際理解活動推進事業」の拠点校、平成21年度は「外国語活動における教材の効果的な活用及び評価の在り方等に関する実践研究事業」の研究校、さらに、国立教育政策研究所の「小学校における英語教育の在り方に関する調査研究」の協力校として、外国語活動(英語活動)の研究を行ってきました。現在は、県教育委員会から3か年の重点課題指定を受け、「コミュニケーション能力の素地をはぐくむ外国語活動の創造」を主題に、これまでの実践の基盤の上、全学年でさらなる研究を続けています。

そして、このような取り組みの様子を保護者や地域の方、さらに県内外の先生方に授業参観や学習発表会^(※1)などで随時公開し、「開かれた学校」化に努めているところです。

(※1) 2010年11月10日(水)、本校にて「外国語活動公開研究会」を開催

外国語活動(英語活動)の授業の推進

平成23年度から5・6年生で外国語活動が完全実施されますが、本校では、すでに『英語ノート』の内容を基に、これまでの実践を踏まえて、2年間を見通したカリキュラムと毎時間の指導案(5・6年生の70時間分)を作成しています。授業では、『英語ノート』に示されたゲームを繰り返したり、活動を入れ替えたり、別の活動を加えたりするなど、『英語ノート』をそのまま使うのではなく、子どもの実態に応じた工夫をしています。

また、1年生から4年生の担任は、外国語

活動の目標や内容、そして『英語ノート』に基づいて、それぞれの学年の英語活動がどのように外国語活動につながっていくのか、単元や教材・教具の開発を行い、さまざまな授業を展開しています。

いずれにしても、コミュニケーション活動で大事にしなければならない点は、目的意識であり相手意識です。他の教科などでも行っているように、活動の目的を明確にし、また、子どもたちが友だちや担任、さらにはALTなどに自分のことや考えを伝えたいという思いを高める授業の工夫を心がけています。

学習環境、教材・教具の充実を

本校では、毎週水曜日の朝に15分間の「コミュニケーションタイム」を設け、外国語活動に関連した活動を行っています。

また、文部科学省作成のソフトや自作ソフトを使って、電子黒板を用いた授業を進めており、子どもたちの反応を見ながら、簡単に絵を提示したり、発音や歌を聞かせたりできます。さらに、絵や写真も自由に動かしたり、加工したりすることができるので、子どもたちの興味を高めながら活動を行うことができます。自作ソフトの作成は、それぞれの担任が行っていますが、全職員の共有教具として職員室に保管し、いつでも使用できるようにしています。もちろん、すべての授業を電子黒板を活用しながら進めているのではなく、必要に応じて効果のある使い方をするように留意しています。

加えて、子どもたちが日常生活を通して英語表現に触れる機会があれば、英語に自然に慣れ親しむことができると考え、学年掲示板の活用やアナウンスショット^(※2)の設置、放送委員会による簡単な英語での放送など、校内環境の整備を行っています。

教材・教具の準備では、学習支援ボランティアに手伝っていただくこともあります。このように、研究や授業の教材・教具の共有化を図るため、校内研究便りの発行や教材コー

ナーを整備しています。

(※2) 人が通ったときにセンサーが感知し、録音されたネイティブの音声 flows 装置

Hello! / How are you? / What day is it today? /
How is the weather today? / What time is it
now? / Good job. / Have a nice day.

学校全体で取り組む外国語活動(英語活動)

外国語活動(英語活動)を進めていくためには、やはり校内研修を十分に行う必要があります。そこで、本校では、公開授業、理論研修会、発音研修会など、研修内容を研究内容と関係づけて、効率的・効果的に行うようにしています。

本校の職員室では、だれかが教材・教具をつくっていると、学年をこえて協力したり、アイデアを出し合ったりしている姿がよく見られます。担任も楽しんで外国語活動(英語活動)に取り組んでいます。だからこそ、子どもたちも意欲的に活動していると思われます。

外国語活動の目標は、「コミュニケーション能力の素地を養うこと」です。1年生から4年生に関しては、新学習指導要領等で指針が示されてはいませんが、本校では、この目標を踏まえて指導しています。子どもが人との関わりを楽しみながら、コミュニケーションを図る大切さを学んでいくことこそ、外国語活動(英語活動)の目指すところであるということを忘れず、今後も全職員で授業づくりを考えていきたいと思います。



6年生が電子黒板を使用している授業の様子

Eco-speak and Greenwords

東海大学

Peter J. Collins

“Oh, I forgot to bring the eco-bags!”

I was visiting my sister in Boston this spring, and we were on our way to the supermarket. I should have been concerned that we’d left something behind, but I was distracted that Nancy had said “eco-bags.” I’d heard – and used – this term many times here in Japan, and just assumed it was Japanese English. Apparently, however, Americans use the same expression to describe reusable shopping bags!

When I was a kid in the 1970s, I was taught the words “ecology” and “economy,” but otherwise the prefix “eco-” had very few uses. As environmental issues have become more pressing, however, “eco-” has been used to form dozens of new phrases. Public service announcements remind us to be more “eco-conscious,” buying products that are “eco-friendly.” By driving hybrid cars and sending Christmas cards made from recycled paper, we can reassure ourselves that we’re “eco-consumers” who care about the quality of life our children and grandchildren will have.

We’re still far from being able to guarantee that quality of life, though. We may take pride in acting more responsibly, but there’s still plenty to worry about. For years now, increasingly violent weather, rising ocean levels, and new animal migration patterns have been attributed to global warming.

A new phrase has emerged from these phenomena: “global weirding,” reflecting the disturbing and unpredictable nature of trends we are trying, unsuccessfully some would say, to adapt to.

Because of global weirding and other “eco-disasters,” many are pessimistic about our planet’s chances for survival. They may have an attack of “eco-anxiety” as they watch the media coverage of the latest oil spill or forest fire. Some people have even turned into “eco-chondriacs,” worrying that every unseasonal heat wave, rainstorm or snowfall is proof of global warming. This new term is a play on the word “hypochondriacs,” which defines people who always imagine the worst when it comes to their own health.

Fortunately for the eco-chondriacs, there are environmental activists fighting to save the planet from climate change and deforestation. Their admiring fans call them “eco-warriors,” an expression which connotes ferocity, strength, and heroism.

Not everyone is a fan of the environmental movements of the last forty years. Back in the early 1970s, activists protested commercial logging in India. To prevent trees from being chopped down for wood, they would literally hug them. While many applauded the activists’ passion, others thought of them as short-sighted extremists, and the term “tree-hugger” soon took on a negative connotation. Since then, new putdowns have emerged describing those who are dedicated to preserving nature. These include “eco-nuts” and “eco-freaks.”

Whether you approve or disapprove of these activists, you have to admit that they are truly committed to greenifying buildings, cities, and even whole countries. Wait – *greenifying*?

Yes, we have a new verb to describe efforts to preserve nature! You can find articles about the “greenification” of America, or find tips for ways to greenify your house by following “reduce-reuse-recycle” and other measures.

One component of greenification has been the renovation of buildings to lessen their impact on the environment. My own elementary school is a good example. Built in the early 1960s, it was a model school in its time. Every classroom, office and corridor was lined with huge plate glass windows – very stylish, but not exactly energy efficient!

By the 1990s, taxpayers in the town were tired of the school’s astronomical heating bills, and the “green building” movement was gaining popularity. The school received a complete makeover, and is now a model of a different kind, boasting lower energy and water use, less waste, and reduced pollution. Around America and the world, “green construction” has become a familiar phrase, describing structures that are both environmentally responsible and resource-efficient.

“Green-,” like “eco-,” has developed into a popular prefix. In Australia, for example, eco-bags are often called “green bags.” And in addition to the traditional blue-collar (manual labor) and white-collar (deskwork) job categories, we now hear about “green-collar” jobs. If in your work you contribute to the preservation or restoration of environmental quality, you are likely working for a “green industry.”

While “green-” itself has positive connotations, “greenwashing” certainly doesn’t. This word derives from the term “whitewashing,” which means to cover up flaws, mistakes, or other negative aspects. By

extension, when a company greenwashes one of its products, it makes false claims about that product being eco-friendly or organic. Now that corporations have seen the profit to be made in labeling a detergent or machine “eco-friendly,” the term “green” has become almost ubiquitous. Efforts to confuse customers with environmentally friendly claims has been called “greenspeak.”

“Greenscamming” is even more negative, used when groups or products with no connection to greenification present themselves as eco-friendly. Some of the world’s biggest polluters, from chemical companies to petroleum corporations, are racing to “green brand” themselves. Positive or negative, with so many creative uses of the term “green-,” it’s no wonder the American Dialect Society voted it the Most Useful Word of the Year in 2007.

There’s some debate about whether the current trend toward eco-consciousness and greenification will prove to be an enduring movement or just a fad. Those who hope for the former are counting on “eco-sustainability,” while those who suspect the latter use the term “eco-chic.” Regardless of how permanent our commitment to preserving the earth, however, there’s no doubt that it’s impacting the English we use in colorful ways.



I love you.

●津田塾大学大学院 野田 小枝子

映画、小説などのジャンルから英語表現を取り上げ、英語の文の形と、そのコミュニケーション機能を考えてみようというコーナーです。よろしくお付き合い願います。

まず第1回は、何といても I love you. でしょう。これ以上の励ましのことばがあるでしょうか。やはり、私たちは自分がだれかにとって大事な存在だと思うから、そしてだれかを大事だと思うから生きていけるのではないのでしょうか。

30年前、ニューヨーク州のほとんど最北端の小さな大学町で、スミスさんという女性の好意で下宿をさせてもらい、そこから大学に通っていました。友達はいたものの、私はかなり孤独でした。日本の大学の専攻は英語学だったのですが、文学部に入り、アメリカの大学生と同じ量の読み書きをしなければと焦っていました。私のゴールは、英語圏の背景知識を勉強してから、再び教員になることでした。専門以前の勉強です。かなりの回り道ということは、自分でもよく分かっていました。

大学に15分ほど歩いて行けるとところに、スミスさんの家はありました。毎朝、出がけにスミスさんが「行ってらっしゃい」の代わりに I love you! それにこたえて I love you, too! というやり取りがあって始まるのが、私の学生としての1日でした。スミスさんは20年以上前に亡くなりました。でも、彼女の I love you. は私の中でずっと生き続けるでしょう。

家族・友人間の愛情表現はストレートですが、それでは、愛情をストレートに口にできない場合にはどうなるか、その一例を米作家スコット・フィッツジェラルドの作品、*The*

Great Gatsby (1925) の中に見てみましょう。

まだ禁酒法の時代、どこからともなく現れ、ある女性の邸宅を見渡せるところに大邸宅を買った男がいました。毎晩のようにその男 Gatsby の邸宅では大掛かりなパーティが催されましたが、実はそのパーティはある女性 Daisy と会うための手段でした。結局 Gatsby は若いころに出会った Daisy が忘れられず、彼女に夫がいるのにもかかわらず、昔の日々を取り戻そうとします。夫の浮気に飽き飽きしている Daisy も、Gatsby の出現に心が揺れます。2人の気持ちがかかなり熱くなったある日、Gatsby が Daisy の家に招かれます。

Daisy は Gatsby を見て、“Ah, you look so cool.”と言います。Gatsby としばらく強く見つめ合った後、テーブルに視線を落として、もう一度、“You always look so cool.”と言います。この場面には、Daisy の夫の Tom もいます。そして初めて強烈なショックを受けます。口から出ている表現は上の通りですが、Daisy は Gatsby に I love you. と言っているのです。これはもう、夫の目の前ではかなり過激なシーンです。You look so cool. は人を褒めるという機能で使われることが多いですが、ここではまさに愛情表現に使われているのです。

ある言葉がどういう場面で使われるか、またその気持ち、意図を伝えたくてもその言葉が口にできない場合に、人はどのように気持ちを伝えるか、答えは数知れず、出会うたびに発見があると思っています。ぜひ、このような発見と一緒に楽しんでみましょう。



編集部からのお知らせとお願い

平成22年度用の教科書に下記の訂正箇所がございます。ご指導の際にはご注意くださいようお願い申し上げます。

● ONE WORLD English Course

学年	ページ	行	箇所	訂正内容
2年	23	側注	try(ing) ● [trái(ŋ)]	try(ing) ● [trái(ɪŋ)]
			help ... with ~ <u>ing</u>	help ... with ~



生徒の心に火をつける 英語教師 田尻悟郎の挑戦

横溝紳一郎 編著 柳瀬陽介 大津由紀雄 著 田尻悟郎 監修

授業が終わるチャイムが鳴っても教室を出て行かない生徒の姿。生徒同士が教え合い、互いに励まし合いながら英語の学習に取り組む生徒の姿。カリスマ教師田尻悟郎先生の英語授業のエッセンスが詰まっています。

A5判／308頁 定価 2,520円

(英語)授業改革論



田尻悟郎 著

教科書って必要ですか？
板書って必要ですか？
教師の説明って必要ですか？ 予習って必要ですか？
英語授業の「常識」とされてきたものを見直すきっかけとなる一冊。

A5判／176頁 定価 1,890円

田尻悟郎の楽しい フォニックス 新装改訂版



田尻悟郎 著

田尻式フォニックスで発音をきたえよう！ 文字と音のつながりがわかる！これで初めての単語でも読める！これから英語を学ぶ人、英語を学び直したい人に必携の一冊。

B5判／72頁／CD1枚付 定価 1,680円

 教育出版

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-10
TEL 03-3238-6965 FAX 03-3238-6999
URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>





小学校 学習指導要領の解説と展開

— Q&A と授業改善のポイント・展開例 —

外国語活動 編

- 監修：安彦忠彦 ■ 編著：大城 賢・直山木綿子
- 定価：1,680 円(本体 1,600 円+税) A5 判／184 ページ



小学校に新設される「外国語活動」とはどのような領域か。
導入の経緯、目標・内容・内容の取扱いについて、
Q & A でわかりやすく解説。
さらに、指導にあたっての
様々な疑問に対する具体的なアドバイスと、
実際の授業の展開例を紹介！

■ 主な内容 ■

- I 新領域「外国語活動」の誕生 II 「外国語活動」はどういう領域か
- III 外国語活動の実践に向けて IV 『英語ノート』の活用 V 外国語活動の展開例

教育出版

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-10
TEL 03(3238)6965 FAX 03(3238)6999

URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp/>

英語教育 通信 ONE WORLD Info (2010 年 秋号) 2010 年 10 月 1 日 発行

編集：教育出版株式会社編集局
印刷：大日本印刷株式会社

発行：教育出版株式会社

発行所：教育出版株式会社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-10

電話 03-3238-6864 (お問い合わせ)

URL <http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>



なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

北海道支社 〒060-0003 札幌市中央区北三条西 3-1-44 ヒューリック札幌ビル 6F
TEL : 011-231-3445 FAX : 011-231-3509

函館営業所 〒040-0011 函館市本町 6-7 函館第一生命ビルディング 3F
TEL : 0138-51-0886 FAX : 0138-31-0198

東北支社 〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-14-18 ライオンズプラザ本町ビル 7F
TEL : 022-227-0391 FAX : 022-227-0395

中部支社 〒460-0011 名古屋市中区大須 4-10-40 カジウラテックスビル 5F
TEL : 052-262-0821 FAX : 052-262-0825

関西支社 〒541-0056 大阪市中央区久太郎町 1-6-27 ヨシカワビル 7F
TEL : 06-6261-9221 FAX : 06-6261-9401

中国支社 〒730-0051 広島市中区大手町 3-7-2 あいおいニッセイ同和損保広島大手町ビル 5F
TEL : 082-249-6033 FAX : 082-249-6040

四国支社 〒790-0004 松山市大街道 3-6-1 岡崎産業ビル 5F
TEL : 089-943-7193 FAX : 089-943-7134

九州支社 〒810-0001 福岡市中央区天神 2-8-49 ヒューリック福岡ビル 8F
TEL : 092-781-2861 FAX : 092-781-2863

沖縄営業所 〒901-0155 那覇市金城 3-8-9 一粒ビル 3F
TEL : 098-859-1411 FAX : 098-859-1411